

中国における都市計画思想の考察
——成都市における府南河整備事業を中心として*

Concept of City Planning in China :
Case Study on Funanhe River Redevelopment Project in Chengdu*

関宏志**・西井和夫***・花岡利幸****

By Hongzhi Guan, Kazuo Nishii and Toshiyuki Hanaoka

1. はじめに

中国における都市建設の歴史は、およそ紀元前 16 世紀の殷商時代まで溯ることができる。それから数千年にもわたる封建社会の中で、中国の都市計画の思想は、欧州において代表的な「田園都市」を基調とする考え方とは大きくかけ離れたものとなっていた。さらに、近世においても、いわゆる改革・開放前の数十年間にわたり、政治的な動乱が繰り返されたために、都市計画・建設にはあまりにも多くの空白が残されている。

ほぼ 20 年前から始まった「改革・開放」という社会的変革とそれに伴う高度経済成長は中国各地において、インフラ(infrastructure)整備や都市再開発を促すことになり、現代は都市建設史上の最盛期に入っているといわれている。

こうした都市建設ラッシュの最中である、1992 年～1997 年にわたって、内陸部にある四川省の都、成都市において府南河整備事業という河川整備事業の一環として、史上最大規模の都市再開発が行われている。

経済の高度成長などの社会的変革は、一般的に言って、都市計画・建設の思想に反映され、都市の発展に大きな影響を与えると考えられる。さらに中国においては、経済改革の推進に伴い、市民の生活スタイルや社会価値観までも変化しつつある。そこで、こうした多岐にわたる変化は、中国における都市計画思想にどのような影響を与えたのかが重要な課題といえる。なお、従来の中国の都市再開発・住宅再開発などに関する研究が行われていたが、中国

の都市計画の基本的な考え方に言及した研究例はほとんどみられない。

本研究は、上記の背景を踏まえ、成都市において行われた府南河整備事業に伴う都市再開発を事例として、そのプロジェクトから読み取ることができ都市計画の思想を考察することを目的とする。

2. 既往の中国における都市計画の思想

中国における本格的な都市建設は、殷商時代(紀元前 16 世紀～10 世紀)と推定されている鄭州商城(河南省)の築造が最始である。その後、東漢時代(紀元 25～220 年)にできたと推定される都市の原型は 1900 年の間に基本的な形は変化していない。この長期にわたる都市計画・建設の指針は、

「首都建設は以下のように行う。九里四方の城に、一辺毎に 3 つの門を設け、城の中に東西、南北に九本ずつの道路を造り、道路幅は九車線とする。宮殿の左に祖廟、右側に祭壇、前面は執務する朝廷、後ろには市場を配置する。市場と朝廷の面積はそれぞれ百畝とする」¹⁾

となる。唐時代の都、長安は、この指針に従う建設された代表的な都市である²⁾(図-1 参照)。古代の中国における都市計画・建設を概観すると、以下の特徴が考えられる³⁾。

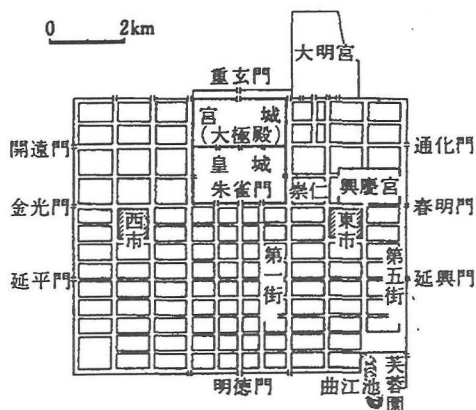
- 都市は地域(国家)の政治的、軍事的または貿易中心である。
- 都市建設は君主を中心に、君主のために展開され、一定の法則に従って計画的に築造される。
- 都市計画の理論および都市の原型が比較的早い時期に完成したが、それを取りまく社会環境(社会制度)が 2 千年あまり変化していないため、本質的な進化が遂げていない。しかも、度重ねる戦災を経ながら、長期にわたって成長し続けた都市は稀である。

* Key Words: 都市計画, 市街地整備, 再開発

** 正会員 工博 山梨大学助手
(〒400-8511 甲府市武田 4-3-11 山梨大学工学部
Tel: 0552-20-8532, Fax: 0552-20-8773,
E-mail: guan@ccn.yamanashi.ac.jp)

*** 正会員 工博 山梨大学助教授
(住所同上, Tel/Fax: 0552-20-8533)

**** 正会員 工博 山梨大学教授
(住所同上, Tel/Fax: 0552-20-8599)



出典：藤岡謙二郎，都市文明の源流と系譜

図-1 唐時代首都長安の都市パターン

上述の都市計画および建設の特徴が大きな変化を起こったのは、1949年の新中国（中華人民共和国）の設立からといえる。それから、さらに1949年～1966年、1966年～1977年と1978年以後と3つの時期に大きくわけることができ、各時期の都市計画の特徴は次のように要約できる。

1949年～1966年の期間の前半（1949年～1958年）は、旧ソビエトの都市計画の単純な模倣がなされた時期であり、中国における都市計画の最も大きな特徴といえる。工業化のための社会基盤施設や、住宅などの生活関連施設が建設された。この時期は、都市開発計画イコール工業開発計画という旧ソビエト型の都市開発の適用都市に至る所で見られる。この時期の後半においては、中・ソ両国の関係が悪化したが、それにもかかわらず、旧ソビエトの影響が続いていた。

次の1966年～1977年は、いわゆる「文化大革命」の動乱期である。この期間中、都市インフラ整備や住宅建設が全面停滞した。この時代は、工場（町）は山の奥に分散して配置され、都市の必要性自体が否定された。その結果、既存の町には工場が乱立し、それらによる都市オープンスペースの占拠は著しい都市機能の低下を生じさせた。

1978年以後、いわゆる「改革・開放」政策の実施の中では、①土地所有権、②開発主体および計画規制対象の役割の明確化、③プランの明示化、④住民意志を反映する計画決定プロセスの確立、といった諸課題への取組みが検討され始め、「中華人民共和国都市計画法」などの都市計画の関連法律および

条例の整備等により、中国における都市計画・都市建設はようやく正常な軌道に乗り出したといえる。

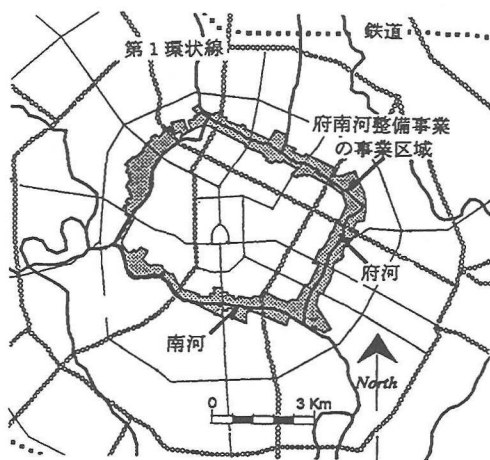
以上の考察により、数千年にもわたる君主・王侯などの支配階層を中心とする権威主義的な街づくりは新中国の設立によってピリオドが打たれたといえる。しかし、少なくとも1978年までには新しい計画思想の確立がなされていたとはいえず、その後の「改革・開放」政策の実行の中で、法制度の整備によって都市計画の基礎がつくられ、ようやく中国における都市計画史が画期的な時代に入ったと判断できる。

3. 成都市および府南河の概要

成都市は、中国南西地域の政治・経済・文化・交通の中心地であり、2300年以上の歴史を持つといわれ、三国志の「蜀」の都として有名である。市街区域面積は60km²で、人口は385万人である⁴⁾。

図-2に示すように、成都市市街部において最も大きな川は府河と南河であり、この河川は通称府南河と呼ばれている。歴史上、府南河は、灌漑、舟運、供水、洪水防御などに機能し、成都市の経済、市民の生活を支えてきた。しかしながら、近年都市開発による市街地のスプロール化、浚渫事業の未着手および不法投棄、不法建設などによって、府南河および河畔地域では、以下のような問題があった。

● 洪水防御能力の低下



出典：沈振江等，中国における土地利用権の回収方式を用いた市街地整備事業⁴⁾

図-2 府南河整備事業区域

河床上昇，河床の勾配が減少しつつあり，平均勾配は 0.1%しかない．そして，河床横断面積の縮小などによって，洪水防御能力が大きく低下した．結果，洪水は成都市民生活の最大の脅威となる．

● 水質の汚染

近年，都市化の進展とともに，都市部における工業化，都市人口の急増，環境の破壊および下水処理設備の不備などによって，流量の減少と伴い，川の水質の汚染状況が激しい（表-1 参照）．

表-1 整備前汚水排出量

河川	産業汚水	生活污水	合計
	万トン/日	万トン/日	万トン/日
沙河	26.19	4.13	30.32
府河	7.64	7.83	15.478
南河	3.35	4.53	7.85
合計	37.18	16.46	53.64

出典：張道成，成都市的河流及府南河総合整理工程概述^①

● インフラ整備の欠如

府南河河畔地域において，簡易なインフラしか整備されておらず，道路の幅が歩道を含む 7～8m であり，3～4m の部分もある．そして路面のいたみが激しい．さらに，交通量の急増のため，交通渋滞は日常的に発生している．また，上水，電力，ガス，下水道などのインフラが十分整備されておらず，市民の生活に大きな影響を与えている．

● 沿岸地域のスラム化

沿岸地域には，ほとんど 1950 年代から「文化大革命」（1966 年～1976 年）時代までの期間に建造された木造住宅（写真-1 参照）で，老朽化が進んでおり，河畔では約 3 万世帯，およそ 10 万人が常に洪水と家屋倒壊の危険にさらされている．

● 自然環境の破壊

府南河河畔地域では，緑化計画がまったくなされておらず，産廃の不法投棄（排出），不法建設などによって，河畔地域の自然環境の破壊が激しい．

4. 府南河事業における計画思想および考察

府南河整備事業にあたっては，歴史，文化の継承および環境の保全を念頭に置いて，以下に示すハード面およびソフト面に関する基本的考え方が示されている．

● 河川の整備

洪水防御はこの事業の最大の目的とされる．その

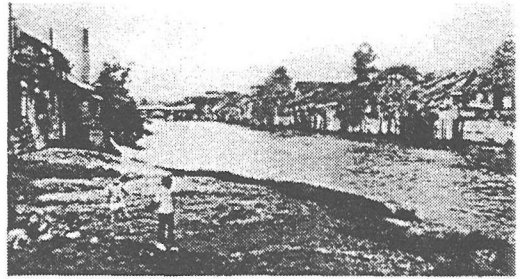


写真-1 整備前の府南河沿岸の様子

ために，河床の浚渫，河道断面の広がりを中心とし，整備事業の短期目標としては 70 年頻度の洪水防御能力を，また長期目標としては，200 年頻度の洪水防御能力を想定している．

● 污水处理システムの整備

最大の汚染源となる，府南河に排出される約 53（万トン/日）の生活・産業汚水に対して，雨水と分流し，汚水だけを新設された下水道を通じて污水处理場へ送り，処理後の水を府南河の下流へ放流する．また，整備地域内の汚染源となる工場の移転により，産業汚染排出量の削減を図る．

● インフラの整備

成都市の放射・環状型の道路網整備を中心に，河畔道路，橋梁の整備，そして舟運の埠頭に対する大規模な整備を行い，さらに，上水，電力，ガス，下水道などのライフ・ラインの充実も行う．

● 沿岸地区の再開発

事業対象地域で撤去された建築物の空き地には，オフィス・ビジネスエリア，レジャーエリアおよび高級住宅が計画されている．そして各地区の土地利用や建物の容積率・高さ等も詳細に計画されている．これにより，投資の誘致，都市の活性化を促進する．

● 河畔の緑化

環境保全と美化のために延べ 23.53 ヘクタールの河畔緑地が計画された．そこで，成都市の歴史・文化を込めるオープンスペースの作成を目指す．

上記のハードな施設の計画を立てる同時に，ソフト面での計画の目標(subject)として「歴史・文化・環境」といったキーワードが明白に打ち出されており，成都市の歴史・文化・環境の復興を図る．すなわち，

①府南河河畔の独特な文化伝統および成都市の 2300 年の歴史文化を継承し，そして発展させるために，整備事業を通じて，河畔に点在してい

る名勝をリンクさせ、成都市の性格をさらに鮮明にし、「二江抱城」（河が町を抱擁する）という独特な歴史イメージの復帰や歴史文化名城の知名度向上を働きかける。

- ②事業地域において、オープンスペースを確保することによって、自然景観と人工的景観を、歴史文化と現代文明を有機的に結びつける空間を演出するとともに、成都市の翡翠ネックレスをイメージした芸術的回廊を形成する。
- ③河道の整備および旧市街の再開発によって、府南河河畔の生態環境の改善、水・緑地を中心とする府南河生態圏を回復させる。
- ④その他に、都市の独特なイメージづくりの面でも複数の緑化区域と河畔緑地が計画され、それぞれの区域には、自然、環境と融和する人工的景観の計画がある。また、緑化区域には成都市の象徴と思われるハイビスカス(hibiscus)、野生リンゴ(crab apple)および柳の木などの植物を植えることにより、成都市の個性を鮮明にさせる。さらに、諸葛孔明や杜甫などのような成都市の歴史文化の代表となる歴史文化名人の彫刻や、唐詩の石碑の築造により、成都市の歴史的なイメージの向上も図られている（写真-2 参照）。

このように、府南河整備事業の最大の目的は洪水防御にあるが、都市インフレの整備により、如何に経済を発展させるかもやはり優先度の高い計画課題であるとえいる。また、市民の生活関連施設整備や公共オープンスペース整備により、新しく市民生活の向上が重要な課題として取り上げられるようになっている。この点が、従来の計画思想と比較して、大きく変化したことといえる。

最後に、都市インフラのようなハードウェアな設備の計画が重視されると同時に、都市の独特な歴史、文化および環境のようなソフトウェアな面も重視さ

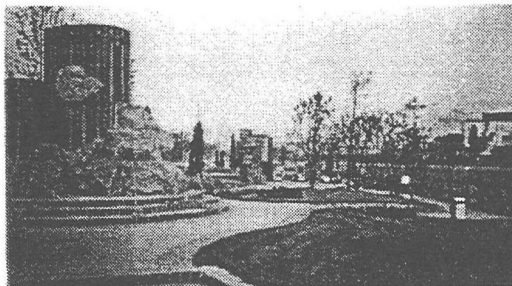


写真-2 緑地における彫刻

れている。このような手法が、都市の発展に供する有効な施策の効果に大きな期待が寄せられている。

5. まとめ

中国における数千年にわたる都市計画パターンを変えたのは、1949 年からの新中国時代であることはいうまでもない。しかしながら、1977 年までの28 年近く、計画思想は新しく確立されておらず、政治的動乱とともに激しく揺れていた。1978 年から改革・開放政策の実施以後、経済の進歩や法制度の整備などに伴い、都市機能の向上、地域経済発展の促進、市民生活レベルの向上から歴史、文化、環境の回復といったかつてなかった要素も計画の視野に入れられるようになっていく。そういう意味で、現在は中国都市建設のルネサンスといえるであろう。

とはいっても、数千年の歴史、独特な文化を有する中国では如何にそれを生かし、都市および経済の発展を促進するかが重要な視点であるといえる。

また、中国における都市計画のプロセスに対する分析および日本との比較や、風土分析の視点からの分析などによって有益な結果を得ることができると考えられる。これら以上の点を含めて、今後の課題とし、データを充実しながら、さらに研究を深めていきたい。

謝辞

本研究は文部省科学研究者助成の日中共同研究（研究代表者：花岡利幸、「山間都市部の地域計画と環境保全のための適正技術に関する研究」）の中で検討された結果の一部に基づいて作成したもので、中国側の分担者、四川連合大学趙文謙教授、楊進春教授、張道成教授から多大なる協力を頂いた。また、本論文の遂行にあたって、広島大学沈振江助手、京都大学大学院博士後期課程王郁氏から貴重な資料の提供を頂いた。ここで、上記の方々に感謝の意を表す。

【参考文献】

- 1) 現代中国の都市建設，中国社会科学出版社，1989。
- 2) 藤岡謙二郎，都市文明の源流と系譜，鹿島出版会，1970。
- 3) 国土庁・名古屋市，国際比較による大都市問題調査研究報告書XⅢ，1994 年 3 月。
- 4) 沈振江，石丸紀興，中国における土地利用権の回収方式を用いた市街地整備事業，都市計画論文集，No.32，pp. 673-678，1997。
- 5) 張道成，成都市の河流及府南河総合整治工程概述，1997 年。